

古田史学の会・東海

# 東海の古代

第134号 平成23(2011)年10月

会長：竹内 強

編集発行：事務局 〒489-0983 瀬戸市苗場町137-10

林 伸禧 〈Tel&Fax：0561-82-2140、メールアドレス：furuta\_tokai@yahoo.co.jp〉

ホームページ：http://www.geocities.co.jp/furutashigaku\_tokai

前々号(131号、平成23年8月)に引き続いて、石田敬一氏の福岡県久留米市周辺の史跡巡りをした「久留米レポート その2」を掲載します。

## 久留米レポート その2

名古屋市 石田敬一

### 1 はじめに

2011年5月6日に久留米へ行き、そこで感じてきたことの報告の続きです。

午前中に筑後国府跡、味水御井神社、高良大社を回り、その状況については「東海うましみずみいじんじやの古代」132号で問題提議を含めて報告しました。今回は、午後に岩戸山古墳とその資料館、石人山古墳とその資料館、高良玉垂命神社、大善寺、御塚・権現塚古墳を見て回った報告です。

### 2 石人石馬について

今回の久留米巡りで、一番の収穫は、地元の皆さんから聞いた石人石馬の話です。石人石馬の石を他に利用した事例として、福島城の城壁への使用が知られていますが、この十七世紀の例からするとほかにも持ち去られてしまったり、持ち去るときに壊されたりした可能性が大いに考えられます。これに加えて、今回、地元の皆さんが子供の頃には、石人石馬は子供の遊びの対象であって、遊びの中で壊れたところがかな

りあったということを知りました。さらに石人が破壊された要因として、身体の痛みを感じる場所と同じ石人の部位を叩いたり削り取ることにより、身体の痛みや障害が治るといふ言い伝えがあり、実際に随分損傷を受けたようです。

このように近代において、様々な損傷を石人石馬が受けてきた状況を考えると、磐井の闘いで降1400年も経過する長い年月の中では、これらの石人石馬は相当の損傷を受けても不思議ではありません。かつて私は『東海とうかいの古代』88号の「磐井の乱はなかった？」で、重要な指摘をしています。あらためて私の考えを示します。

『釈日本紀』所引筑後国風土記には次のよう  
にあります。

筑後国風土記に曰く、上妻かむつま県。県南、二里。筑紫君、磐井ぼふんの墓墳有り。高七丈、周六十丈、墓田、南北各六十丈、東西各卅(四十)丈。石人・石盾、各六十枚。交陣、行を成して四面しゆうせうを周がとう匝す。東北の角に当りて一別区有り。号して衙頭がとうと曰う。衙頭は政所せいしよなり。其の中に一石人有り。縦容しゆうようとして地に立つ。号して解部とくべと曰う。前に一人有り。裸形らけいにして地に伏す。号して倭人とうじんと曰う。生けりしとき、猪を倭むぬすを為す。仍りて罪を決するに擬す。側に、石猪四頭そらぶつ有り。臙物びきと号す。臙物は盗物なり。彼の処ところも亦、石馬三疋・石殿三間・石蔵二間有り。

古老おほど伝えて云う、雄大迹の天皇の世に当り、筑志の君磐井。豪強暴虐、皇風じたかに倣になわず。生平の時、預あらかじめ、此の墓を造る。俄かにして官軍動発し、襲

わんと欲するの間、勢の勝たざるを知り、独り自ら豊前の国、上膳の県に遁れて、南山峻嶺の曲に終る。是に於て官軍追尋して蹤を失い、士、怒り未だ泄まず、石人の手を撃ち折り、石馬の頭を打ち墮としき。

古老伝えて云う、上妻の県、多くは篤疾有りき、と。蓋し茲に由るか。

(『釈日本紀』卷十三、507～508頁)

この前半の記述では、筑紫君磐井の墓墳について、石人と石盾がおのおの60枚、交互に陣をなして墓の四面の周りを取り囲んで並んでいる様子が描かれています。その状況は乱れたところはなく整然としており、壊れたり倒れたり、持ち去られたりした様子もありません。

また別区には地に立った解部の石人と地に伏した倭人の石人、石猪四頭、石馬三疋、石殿三間、石蔵二間が壊された様子もなく存在しています。

つまり、筑後国風土記が書かれた時点では、石人・石盾・石馬等はしっかり復元されていたといえます。決して壊れていません。これが素直にこの文を読んだ理解です。

この記述について、古田武彦氏は『よみがえる九州王朝—幻の筑紫舞』(角川選書、1983年)の「第三章 九州王朝にも風土記があった」において、次のとおり記述されています。

**(一) 官軍によって「石人の手を撃ち折り、石馬の頭を打ち墮された」にもかかわらず、その原形状(「石人石盾各六十枚、交陣成列」等)が冒頭に整然と記されていること。**

(『よみがえる九州王朝』192頁)

古田氏は、原形状の記述についての的確に認識されています。ただ、古田氏は、原形状について、これ以上は言及されていません。

これに関して、林俊彦氏は、「わたしひとりの『磐井の乱』2—磐井死すとも史実は死せず—」において、さらに明確に指摘されました。

**まことにリアルで詳細な描写です。そして岩戸山古墳の現地を観察して書かれたものに間違いありません。もう一つ、この文が書かれたときには、石人石馬は無傷のはずです。もちろん墳墓の本体も—中略—葛子はちゃんと直したのです。筑後国風**

**土記が成立した時、石人石馬は無傷だった。風土記自身がそれを証言している。これが私の新しい発見です。**

(『古田史学会報』号、頁)

通説では、現状の石人石馬が損傷を受けていることについて、この筑後国風土記の後半にあるように、士の怒りが未だに止まず石人の手を撃ち折り石馬の頭を打ち墮とした時点の状況が、そのまま現在の損傷を受けた状況に直結しているかのように解釈されています。

しかし、筑後国風土記が成立した時点では、石人などは損傷していなかった、整然と並んでいたことが読み取れます。したがって、磐井の戦いの際に壊されてしまったこれらの石人などはその後筑後国風土記成立の時点までに修復されたといえます。その後、長い年月の中で、また石人石馬の損傷・亡失が起こったものであると考えるのが妥当です。

この思考を裏付けたのが、前述した久留米の地元の方々から聞いた言葉です。それは、この石人石馬が、時を重ねるたびに次第に壊されてきた事実の証言であり、これを得られたのは、たいへん大きな成果であったと私は感じています。

筑後国風土記の記述は次のことを明確に示しています。確かに石人等は磐井の闘いの時に壊されました。これは間違いありません。しかし、その後、筑後国風土記が成立する前にはりっぱに復元されました。これも間違いありません。この理解と認識が重要です。

その上で、長い年月の中で他で利用するために壊されたり、持ち去られたり、叩いたり、遊びの対象となったりして、次第に損傷し亡失し、現状のようになったと考えるのが適切な理解であると私は思います。

つまり筑後国風土記の前半の記述は、現状を記述しているのであって、通説の解釈が間違いであることを示す重要な証拠なのです。

次に筑後国風土記の後半の記述「古老伝えて云う」以下について、私の考えを述べます。これに関しても『東海の古代』88号の「磐井の

乱はなかった？」で指摘しています。

あらためて整理して述べます。

この「古老伝えて云う」以下は、前半が磐井の墓墳の風土記成立時点の状況を記述しているのに対し、古老の語りの内容を示しています。現状はこうであるが、古老はこのように昔のことを伝えていると示したのだと思います。

ですから、筑後国風土記が書かれたときよりも時代が遡った時点の話なのです。繰り返しになりますが、簡潔に示せば、今は整然と石人などが並んでいるが、昔は壊されたことがあったことを伝えているのです。

### 3 岩戸山歴史資料館

#### (1) 石馬

岩戸山歴史資料館には、有名な石馬が展示されています。この石馬は胴体の真ん中で割られており、頭部と脚部がありません。頭部と脚部が展示されていないところをみると、一緒に発見されなかったということでしょうか。



岩戸山歴史資料館に展示の石馬

この石馬の頭や足はどうしたのでしょうか。磐井の戦いの時に壊されたそのままであれば、打ち落とされた頭は胴体と一緒に出土するはずで、ところが見つからないようです。それは、他へ持ち去られたことを意味するのでしょうか。

筑後国風土記では頭が落とされたことは記述されていますが、胴体を割ったり、脚部を折ったことは記述されていません。持ち去ったとも記述されていません。風土記の記述を厳密に解

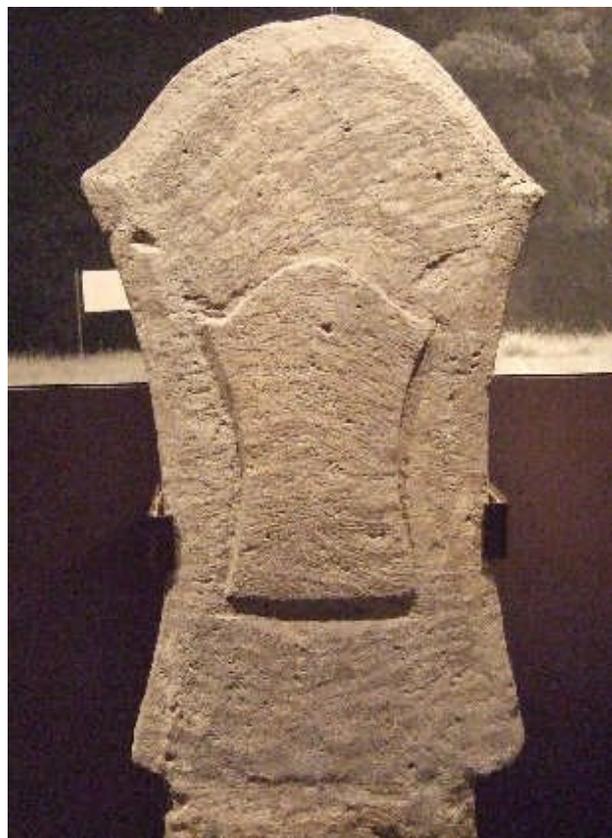
釈すれば、現在、資料館に展示されている石馬の現状は、頭部が打ち落とされていることだけは一致するものの、そのほかは風土記の記述と合致していないと言えるでしょう。

しかも筑後国風土記によれば石馬は3頭あったはずで、他の2頭も見あたらないようです。今後岩戸山古墳から発見される可能性は残されているかもしれませんが、見つからない現時点では、これもまた持ち去られたと考えられましょう。

持ち去られたとすれば、それは筑後国風土記が成立したあとの出来事です。そして磐井の君一族の力が無くなって、石人石馬が管理されなくなったときのことでしょう。その時期は、おおむね石人石馬を伴う古墳が造られなくなった時期と考えて間違いなさそうです。

#### (2) 石盾

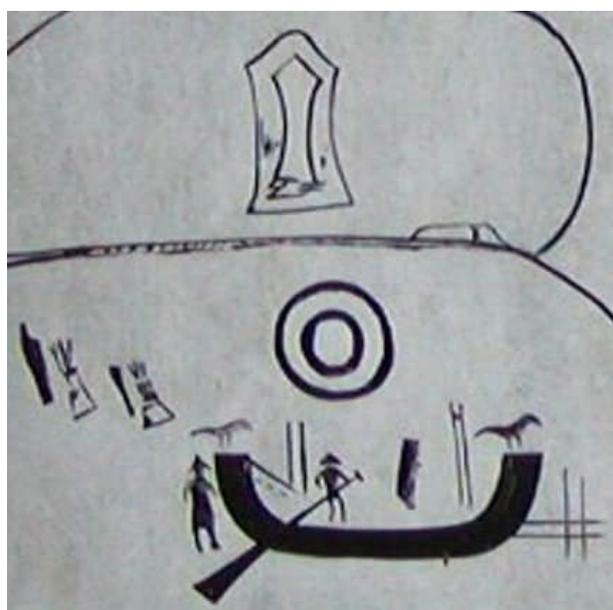
岩戸山歴史資料館に展示されている石馬のように胴体の真ん中で割られ、足と頭が無いものがある反面、ほとんど損傷がない石盾もあります。この石盾は大正の初めに岩戸山古墳の円部の東南隅において堀の外堤から発見されました。



ほぼ損傷がない石盾（岩戸山歴史資料館展示）

その発見の状況は、筑後国風土記の記述「石人・石盾、各六十枚。交陣、行を成して四面を周しゆうそう匝す」に合致しています。また、復元された後1400年の間、倒れたまま土の中に埋もれていたと思われ、このほぼ無傷の石盾は、石人石馬が復元されたとする私の考えを裏付ける貴重な証拠だと思います。

また、この石盾は久留米市の東にあるうきは市の鳥船塚古墳や福岡県嘉穂郡桂川町の王塚古墳の壁画の盾と同じ形をしており、私はその関連性に大いに注目しています。ただ、国指定史跡である鳥船塚古墳は現在大半が失われているようで残念です。



鳥船塚古墳の壁画

### (3) 環頭大刀

岩戸山歴史資料館では、観覧料がたったの130円で多くの重要な文化財を閲覧でき、さらに館員のかたに丁寧な説明を受けることができます。展示物の写真も取り放題です。

この展示の中で特に目を惹くものは、岩戸山古墳から東へ2.5kmほどにある釘崎古墳群の中の3号墳から出土した環頭大刀です。

これは東京国立博物館に展示されている朝鮮半島から出土した5世紀の有銘単龍紋環頭大刀にそっくりであり、そこには「不畏也ゆうめいたんりゆうもんかんとうたち口令此刀主富貴高遷財物多也」という銘文が背に見つかっています。この大刀を所持する者は何も畏れ

ることはなく高い地位と富が保証されるという内容を示すものです。岩戸山歴史資料館展示の釘崎3号墳の大刀は、まだX線写真を撮っていないということで、これにも銘文があるのではないかと期待されます。また武寧王墓出土と同じような環頭大刀であることから、朝鮮半島と関連性があるものと思われ

ます。この釘崎3号墳は、調査前に削平により消滅しており詳細はわかりません。ただ、35mほどの方円墳で横穴式石室であったとのこと。ただ残念ながら十数基の古墳がある釘崎古墳群では、現在完全な形で残っている古墳はほとんど無いようです。



左：東京国立博物館展示、右：釘崎3号墳出土



武寧王墓出土

### (4) 耳飾り

もう一つ目を惹くものは、岩戸山古墳から東に3.5km、釘崎古墳から東南へ1kmほどのところに位置する立山山古墳群の8号墳から出土した金製垂飾付耳飾りです。

この金製垂飾付耳飾りに似ているものが春日

市奴国の丘歴史資料館にありました。奴国の丘のものは全長5.6mの方円墳である日拝塚古墳から出土したもので、日拝塚の耳飾りのクチナシの実の垂飾は2つあります。

これに対し、立山山は1つですが、垂飾の形や長さなどは、よく似ています。クチナシは東アジアの暖地に自生する低木であり、いかにも中国や西日本の地域の飾りとしてふさわしいといえましょう。

日拝塚古墳からは、金製垂飾付耳飾りのほかに、琥珀や水晶やガラス製の玉が出ているばかりではなく、鏡、環頭大刀も出土しており、朝鮮半島と関連の深い王であったと思われます。6世紀初めの古墳とされます。



立山山古墳8号墳出土



日拝塚古墳出土

300基の古墳がある八女古墳群から連なる耳納山地には1000基もの古墳があるとされますが、多くが消滅しているか、実質的に保存されていないかであり、大王級と思われる古墳が知らないままに消え去っているのが現状であり残念に思います。立山山古墳群の古墳の保存状態もかなり悪いようです。

## (5) 記念

帰り際に説明していただいた館員の方から黒曜石で作った鍬をいただきました。素敵なおみやげになりました。いま古田史学の「壹」のバッジと一緒にデスクの上に飾ってあります。

## 4 石人山古墳と資料館

### (1) 双脚輪状文

広川町古墳公園資料館は入場料が無料ですが、施設はたいへん立派で近くにある弘化谷古墳の装飾壁画の実物大レプリカが展示されています。また、隣接して石人山古墳があります。資料館とこれら2つの有名な古墳を見学するにはちょうどよい場所にあります。美しい女性館員のかたの説明によると、すでに現地の壁画はずいぶん薄れてしまっているとのこと。現物の確認が難しい現在は、実物大レプリカがたいへん参考になります。この壁画の双脚輪状文は全国で4例しか発見されていない文様で、これまでは貴人を象徴する翳ではないかとされる説がありましたが、貝を表した文様とするのが最近の研究成果とのこと。たしかに桂川町の王塚古墳と熊本県の横山古墳の文様は触手がそれぞれ下と上を向き、熊本県の釜尾古墳とここ弘化谷古墳の触手は横を向いており、またうちの柄らしきものもありませんから、翳であるとは全く考えられません。



弘化谷古墳の壁画のレプリカ



釜尾古墳の双脚輪状文（復元）

新説は翳を否定しました。この点については同感です。しかし、貝であるとする説について私は素直にうなずけません。

というのは、弘化谷古墳のものは同心円や単なる円に足を付けた文様ですが、二枚貝であれ

ば帆立貝形が一般的であり丸い貝というのはイレギュラーではないでしょうか。巻き貝であれば渦状に貝が描かれていても良さそうです。いずれにしても貝にしてはあまりにも真円に過ぎるように思います。私は、この文様が貝であるとする新説は、ぴったりと当てはまらないように感じます。また、王塚古墳や釜尾古墳の壁画は円ではなく、縁がぎざぎざに描かれており、同じ双脚輪状文そうきやくりんじょうもんとひとくくりにするには、ずいぶん文様が違います。貝でこのようなギザギザがあるものは、カサガイなどが考えられます。しかし、私が調べた範囲では全く同じ形の種類はないようです。また、貝だとすれば足が大きすぎますし、貝殻の上から足がでており図形として不自然だと思います。したがって、王塚古墳や釜尾古墳のものについても貝とするのは、私には疑問です。

あの世で食に困らないように食べ物としての貝を描いたとするのであれば、貝塚から多く出るハマグリやアサリなどの形、いわゆる帆立貝形のもの自然ではないでしょうか。また魔除けとしての意味であれば、沖縄などで魔除けに使われているスイジガイが適当であると思いますが、スイジガイは6つの尖った角があり、その特徴は描かれていません。

## (2) 天体を表す円形文様

さて、弘化谷古墳では、双脚輪状文そうきやくりんじょうもんとともに、その左右には同程度の大きさの同心円の円形文様が一緒に描かれています。これをどのように説明するのでしょうか。これも貝として説明するのでしょうか。この同心円の円形文様は幾何学模様であって侵入者などを威嚇するための絵柄でしょうか。なぜ、貝のすぐ隣に円形文様が描かれているのでしょうか。私には双脚輪状文そうきやくりんじょうもんと同じ種類のものを表している文様であるように思われます。大きさもほぼ同じで、位置もほぼ横一列に描かれています。ある時は足があるが、ある時は足がない円形文様と考えるべきではないでしょうか。

となると、まず、このような円形文様が何を表しているのかを探る必要があるように思います。



めずらしづか  
珍敷塚古墳の玄室奥壁の壁画（復元）

うきは市の珍敷塚古墳の壁画は、発見当時壁画の色が鮮やかに残っていたということで、有名になりましたが、今は何も管理されていない状態であり、高松塚古墳などとは全く取り扱いが違う残念な状況です。しかし、この壁画の復元図があり、これが重要な内容を私たちに示してくれます。ここで左端に描かれている円形文様については、船の頭上に一つ描かれています。船とペアといってもよいでしょう。これは明らかに太陽や月などの天体を意味する文様と思います。

これについて、古田武彦氏は『邪馬壱国の論理』（ミネルヴァ書房、2010年6月20日）の「珍敷塚」の項目の中で次のとおり述べています。

**倭人が太平洋を横断し、南アメリカ大陸まで至った。それが事実なら、倭国側にも、何かその“痕跡”でもあるはずではないか。——そのように考える読者もあろう。**

わたしはこの点につき、同じ九州古墳壁画の中に注目すべき、異様な画が存在することを指摘しておきたい。それは、珍敷塚と呼ばれる古墳の壁画である(口絵二ページ参照…石田注. 壁画の写真)。

この画の全体について、今まで統一した説明はなされていないから、端的にわたしの理解と「想像」をのべさせていただきたい。

まず、明晰な形で描かれているのは、左端の舟と人だ。舟の先頭(右のへさき)には鳥がとまっている。「天の鳥舟」といわれる。

人と鳥の間には、帆を張る柱のようなものが二本立っている。人のろの向きからいっても、左端は、舟の後尾である。舟の上には、太陽のようなものが輝き、太陽のまわりを同心円の円環がつつんでいる。

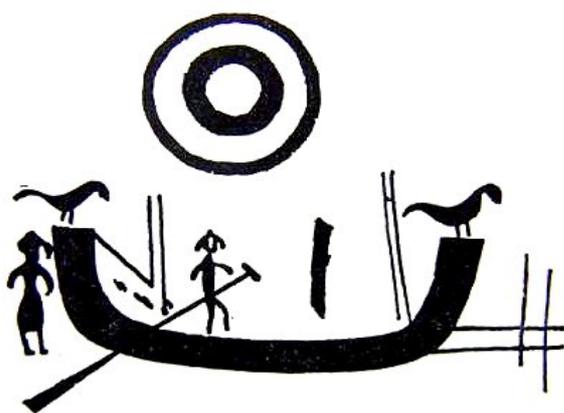
この円環中には、一定の間隔で星のようなものが並んでおり、この「太陽」と「星の円環」は、倭人にとって、天体全体のシンボル（記号）ではないか、とさえ思われる。天体といえば、この画全体の上部を左端から右端までつづいている“帯状の連なり”は、やはり中に星状の点をふくみ、天空にかかる銀河系（天の河）のような印象をもっている。

（『邪馬壹国の論理』295・296頁）

古田氏は、通説では中央の3つの靫（<sup>ゆき</sup>矢筒）とされる文様について、五郎山古墳の壁画を例にあげて、人間が靫より小さく描かれていることから、これは塞、つまり城塞や宮殿であると示されています。

私はこの靫に関して『東海の古代』129号で、古田氏が示すように城塞などの建物や、私個人の意見として大盾ではないかと指摘したところです。

話がそれましたが、この左端の円形模様について、古田氏は天体全体のシンボルとされます。私もこの船とペアで描かれる同心円は天体であると思います。先に示した鳥船塚古墳の壁画も船とペアで同心円が描かれていますが、同様にこの同心円も天体であると思います。



鳥船塚古墳の玄室奥壁にある壁画の模写  
（現地説明看板）

### (3) 鏡を表す円形文様

それでは同心円などの円形文様はすべて天体かという、それはどうも違うようです。

方格規矩鏡などの中国鏡や日本製の三角縁神獸鏡には、その縁に下の写真のような連続した三角の文様があります。



方格規矩四神鏡（佐賀県桜馬場遺跡）の鋸歯紋

この三角の連続文様が円形文様の縁に描かれた石材史料があります。それは明らかに三角の連続文様を伴う鏡を描いています。つまり、鏡であることがまず間違いないと考えられる文様です。

たとえば、<sup>おおとばなみなみ</sup>大戸鼻南古墳の石棺の側石の内面に陰刻された円形文様は紐状のもので上から吊り下げられています。さらに円形模様の縁には三角の鋸歯が陰刻されています。鏡が吊り下げられていると考えて間違いなさそうです。



大戸鼻南古墳の石棺側石内面の文様

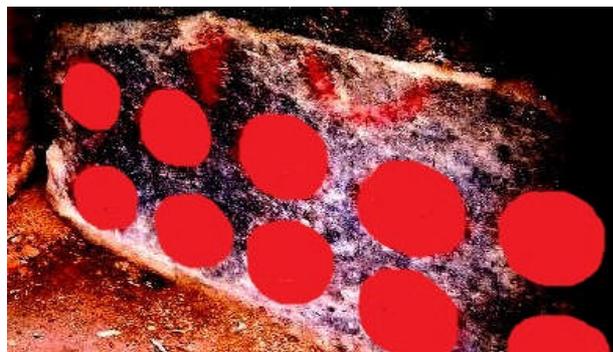
下は「装飾古墳探訪紀」(<http://www.geocities.jp/SilkRoad-Ocean/8043/>)の装飾古墳写真集に掲載されていた長迫古墳の石材の写真です。これを見ると、やはり同様に紐状のもので上から吊り下げられており、縁には三角の鋸歯の模様があります。しかも同間隔で吊り下げら

れており、これは鏡であると確認できます。この写真では3枚だけですが、ほかの史料によれば、少なくとも6枚の鏡が横一列に陰刻されています。

また同じホームページの永安寺東古墳の写真では、前室右側壁に同間隔で二段に並んだ10個の赤色の円が確認できます。これも鏡を表していると考えられます。



長迫古墳の鏡の紋様



永安寺東古墳前室右側壁(写真を修正)

長迫古墳や永安寺東古墳の写真から類推すると、弘化谷古墳の壁画の円形模様は、珍敷塚古墳や鳥船塚古墳の壁画のように船とペアになっているのではなく、複数の円形文様が横に並んだ図形の構成になっています。

以上のことを踏まえると、弘化谷古墳の壁画の円形文様は、天体ではなく鏡を描いたのではないかと考えられます。

#### (4) 弘化谷古墳の双脚輪状文そうきやくりんじようもん

弘化谷古墳の双脚輪状文そうきやくりんじようもんについては、円形文様に二本の足のような図形が加えられています。この2つの双脚輪状文そうきやくりんじようもんは、それぞれ足の形や円形の中の模様が違います。しかしながら他の円形文様と見比べると、色や線の太さ、同心円の数など図柄が異なるものの、外形はほぼ同じ大きさで、足が無ければ同種の図形を表し

ていると見てよさそうです。同じように並べられた図形は、同じ種類のものと考えてのが妥当ではないでしょうか。ある時は足のようなものが付き、ある時は付いていないかあるいは見えないように表現しているように思われます。では、その足のようなものは一体なんでしょうか。

先に示した大戸鼻南古墳や長迫古墳の鏡には紐が付いて上からぶら下げられ、1本のまっすぐな直線を表した図形で鏡が表現されています。この紐をほどいたり切った場合には、どのように表現するでしょうか。その紐は2本に別れ、そしてだらしとして曲線を描くでしょう。弘化谷古墳のものは、紐が横に付いており、だらしとした状態を示しているように思います。そして2つの双脚輪状文そうきやくりんじようもんの足の形がわずかに異なるのは、紐が曲がっている状態が異なっているからだと思います。紐の状態によってその形状が微妙に変化していることの現れではないかと思えます。つまり、私は、この足のようなものは、鏡に付いている紐であると思えます。

上から吊したときには、紐は1本でまっすぐに描かれており、この紐がほどかれたり切れたりしたときには、だらしとした2本の紐となり、曲線で描かれたのです。紐が鏡の横に付いているのは、まさに鏡が吊されているのではなく鏡が置かれた状態を表現したのだと考えれば合点がいきます。

#### (5) 石人山古墳の石棺

広川町古墳公園資料館の館員の方のご厚意で私のために石人山古墳の石人と横口式家形石棺がある建物に案内していただきました上、鉄柵の扉をあけていただきました。たいへん感謝しています。



## (6) 直弧文についての考察

問題は、石棺の下段にある直弧文です。

直弧文は複雑に印された円弧をバツテンで区切る文様です。刀や鞍などの武器のほか、石棺、埴輪など埋葬に関わるものに見られ、災いを取り除くための呪術的な役割を果たした文様と考えられています。刀装具や石棺に描かれた文様が基本であり、おおむね円形の図形をX字形の対角線で区切る構図です。王者の文様とされながら、その図形の意味するところがハッキリと解っていない、いわば謎の文様といってもいいでしょう。直弧文については、その意味を明確に示した学説は無いようです。

多くの古墳から割られた鏡が出土します。なぜ鏡が割られて埋納されたのか。その理由は明確になっていないように思います。割れた鏡について、長年地中に埋まっている間に自然と割れてしまったとする説も根強くあるようですが、福岡県糸島市の平原遺跡では、そこから出土した直径2尺の八咫鏡5枚を含む40枚の鏡が細々に破壊されて埋められていました。また、唐津市の中原遺跡で出土した方格規矩鏡は、布で割った鏡を包んで納められていました。これは時間が経過するうちに自然に割れたのではなく故意に割って埋められたものです。最近見たテレビ番組では鏡を破壊する実験が放映され、その実験結果は一度熱を加えてからハンマーで叩かないとうまく割れないということでした。つまり鏡は、故意に割らないと自然に放置して割れるような物ではないことが証明されていたのです。これは破壊してから埋納することに重要な意味があったからであると考えられるべきでしょう。

一体何故、鏡を破壊してから墓に埋納したのでしょうか。その理由がわかれば、この直弧文の意味も同時に解明できると私は思います。

私の知る限り、これまで割られた鏡の意味を明確に示された学者は一人もおられないようです。

謎とされる鏡を割った理由について、私見を述べます。

鏡には二通りの埋納の方法があったのではな

いかと私は考えています。一つは鏡を掲げて光を反射させることにより邪悪なものから防ぐ方法です。これは<sup>おおとぼなみなみ</sup>大戸鼻南古墳や長迫古墳などで、吊り下げられた鏡をいくつか並べている文様があるところから推測されます。石人山古墳の横口式家形石棺においても上段に鏡が横一列に並べられています。

もう一つの方法は、被葬者が所有していた鏡を割ることで被葬者がこの世に戻らず成仏するように、また悪霊にならないようにお供えする方法です。これにより、被葬者の霊魂が守られるとともに一族の繁栄がもたらされると考えられていたのではないのでしょうか。これが割られた鏡の謎に対する私の考えです。

日本の風習に「鏡割り」(別称鏡開き)があります。死者や先祖の御魂が子孫のもとを訪れる正月があけた後に「鏡割り」が行われます。その由来ははっきりしないようですが、一説には、鏡餅は垂仁天皇の時代に始まり、八咫鏡に擬えた鏡餅を割って食べることによって家族の繁栄を願う行事だとされます。ただ、ここで重要なことは、餅を鏡に擬えてお供えすることと、それを槌で小さく割り砕く行為です。私はここに鏡を割って墳墓に埋納する名残があるような気がします。

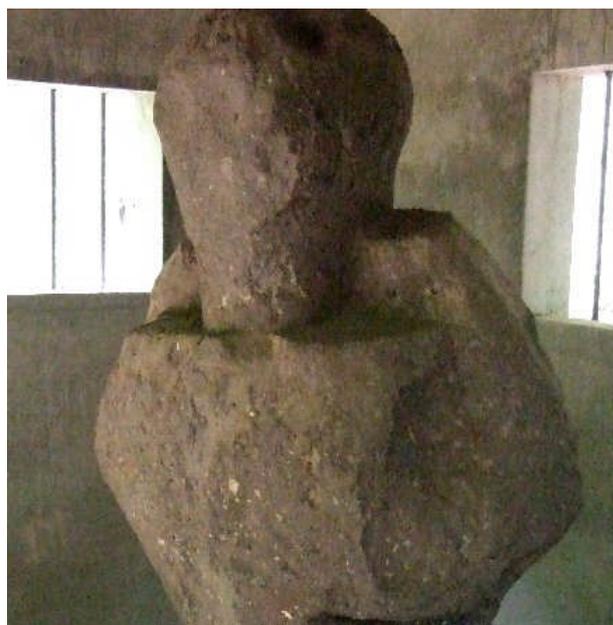
割られた鏡、割られていない鏡のどちらにする鏡の実物を埋納する古墳、鏡の代わりに石材に陰刻したり、壁画として鏡を描いた古墳、いずれにしても埋葬の際に鏡が重要なファクターであったことは間違いがありません。その鏡を被葬者と一緒に埋納したり描いたりしたのは、鏡自体が持つ魔除けの力を信じたからにほかなりません。さらに鏡を割ることにより被葬者の成仏を祈願するとともに一族の繁栄を願ったのだと思います。

私がこの直弧文を見たときのファースト・インプレッションは、鏡を割った図形です。一見複雑に見える弧は、基本的に円弧を描いています。一番外側の線に注目すれば、基本が円形であることがわかります。そしてその円弧を斜めにたすきがけの直線で区切っている形が、この直弧文であるといえましょう。直弧文は円い鏡を割った文様であると私は思います。これが直弧文についての私の最初の感想でした。その直

感が当たっていたと思います。つまり、このクロスの直線は、鏡を割った文様であると考えた時、その図の構成の意味が理解できると思います。直弧文の中には、本来の形がわからなくなってしまったようなものが見受けられますが、この石人山古墳の直弧文は、直弧文本来の図形「割られた鏡」をわかりやすく示したものとして重要であると思います。

### (7) 損傷を受けた石人

「2 石人石馬」の項でも書いたように、身体の痛みを感じるところと同じ石人の部位を叩いたり削り取ることにより、身体の痛みや障害が治るといふ言い伝えがありました。石人山古墳の石人も実際に随分損傷を受けたと館員の方からお聞きしました。



顔や腕の損傷が激しい

実際に、石人山古墳にある石人の顔は全く判別できないほどに損傷を受けています。また、腕のあたりも大きくえぐれています。胴のあたりはよく赤い色が残っていますが、胸より上の赤い色はほとんどわからなくなっています。

この損傷の原因はわかっています。前述したとおり近年の言い伝えにもどづき生じた損傷です。筑後国風土記で立派に復元されたものが、その後、損傷を受けてきたことの証拠だと思います。



赤色がよく残っている

## 5 高良玉垂命神社



鹿児島本線の西牟田駅の北東、久留米市荒木町荒木の高良玉垂命神社に行きました。細い田んぼ道を行くと近くに数軒の農家が集まっている農地の中に目指す神社がありました。高良玉垂命神社は福岡県内に数社ありますが、この神社は八女古墳群のいちばん近いところにあると思われ、関連性があるのかどうか、またどのように管理されているのか興味をひきました。

拝殿の前で清掃をされている人がおり、今でも大切にされていることがわかりました。清掃されていたのは管理人の方で、お話を聞くことができました。詳しいことは知らないが、ここに祀られたのは天平勝宝何年かの西暦750～760年の頃とのことです。

『高良玉垂宮神秘書同紙背』（高良大社刊・昭

和四七年)によれば、天平勝宝元年(749年)に高良玉垂命は宇佐八幡に九州の宗廟の地位を譲ったとされます。次の年、天平勝宝二年(750年)に宮崎県美郷町北郷区宇納間にある宇納間神社(旧伊佐賀神社)は、第一の臣下となった高良玉垂命を伊佐賀大明神として勧請したとされます。これは宇佐八幡宮から延岡今山へ鎮座の途中に宇納間神社で御休座したことが縁起になっていますが、延岡市の今山八幡宮は天平勝宝年間の創建とされますので、時期は合っているように思われます。

荒木の高良玉垂命神社が750年頃に高良玉垂命を祀ったのは、749年に宇佐八幡に九州の宗廟の地位を譲ったことが契機だったのでしょうか。



管理人さんによれば、平成3年の台風で倒壊する以前の拝殿は、現在より間口が2間大きかったとのこと、拝殿を再建するには費用がかかるため現在の大きさになったとのこと。その台風の際にご神体を見られ、それが祭祀で用いられる青銅づくりの御幣であったことを初めて知ったそうです。

なお、荒木の高良玉垂命神社の1kmほど北東にある荒木町藤田の玉垂宮は、50~60年ほど古く祀られ、さらに2kmほど北西の荒木町下荒木にも高良玉垂命神社があるとお聞きしましたが、時間がなかったため、ともに寄りませんでした。どんなところか興味が湧きました。

## 6 大善寺と御塚・権現塚古墳

神功皇后の頃に創祀とされる大善寺玉垂宮とおんつか・ごんげんづかこふん御塚・権現塚古墳は、実際に現地に行ってみると思ったより近くにありました。

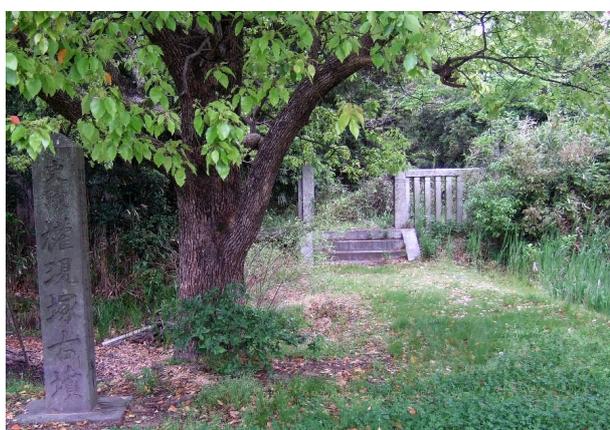


鳥居には玉垂神社とあります

→ N



現地の説明板の写真から



鬱蒼として全貌がわからない御塚・権現塚古墳

玉垂宮の北の鳥居と御塚古墳は隣接しているといってもよい近さにあり、関連性は大きいにあ

ると感じられました。

とにかく発掘調査がされていない御塚・権現塚古墳の今後の調査に期待します。

## 7 おわりに

日本に仏教を伝えたと言われる百済の聖明王の父、武寧王は、王妃と共に韓国・公州市郊外の宋山里に合葬されています。武寧王は癸卯年（523年）に崩じ己酉年（529年）に埋葬されましたが、生前にはすでにいわゆる方円墳の築造を終えていたとされます。

生前に方円墳の築造を終えていたという点は、筑紫君磐井と同じです。筑紫君磐井が磐井の戦いの時に亡くなったとすれば528年ですので、磐井と武寧王は同じ時代に生きた人物です。しかも武寧王は斯麻王ともいい筑紫の各羅嶋で生まれたとされることから、九州とは非常に関連が深い人物であり、磐井とは同じ思想、共通項を持っていたのではないかと思います。

この武寧王陵からは、金環の耳飾りなどの金細工製品や中国鏡など多くの遺物が出土しており、磐井の古墳からも多くの金細工製品や中国鏡が出土するのではないかと思います。早期の調査に期待します。

今回の久留米巡りで強く感じたことは、3点あります。

1点目は、古墳などの遺跡の調査は着実に進められているものの、岩戸山古墳を始め御塚・権現塚古墳など重要な古墳が未調査のままであり不十分であることです。

2点目は、これまで、あまりにも多くの遺跡がないがしろにされてしまったのは、大和王朝に関連が深いと思われるものに偏重しすぎたせいではないかということです。一元史観が元凶ではないかと思います。

3点目は、装飾古墳は日本特有のものであるにもかかわらず、その多くが色あせてしまい、適切な保存がされていないことです。大変残念です。できるだけ色が鮮明なうちに忠実なレプリカを作ってほしいと心から願うものです。

遺跡の調査や保存状況などに関しては、こうしたいろいろな問題を感じましたが、久留米の地元の皆さんとの出会いは、たいへんよかった

と思います。いろいろなお話をうかがうことができ、またその出会いがとてもいい思い出になりました。

## 年代記類に記載されている古代逸年号

瀬戸市 林 伸禧

### はじめに

本誌に古代逸年号を記載している文献(全集、大系本)、および、その文献に記述されている古代逸年号を報告したが、それは個々の逸年号についてである。

今回、『二中歴』で代表される年代記・王代記(以下「年代記類」という。)を42本収集したので報告する。なお、今回報告する年代記類は他の文献から書写版ともいえる文献もあるが、すべて文献批判をせずそのまま掲載した。

また、これらの年代記類を基にして、古代逸年号の原形が把握出来るか試行してみた。

### 1 年代記類

収集した年代記類は、表1「古代逸年号(年代記・王代記)文献一覧」のとおりである。

また、年代記類毎に「年号・元年干支・通用期間」を記述したものを、別表1「年代記類に記載している古代逸年号(年号・通用期間・元年干支)一覧」のとおり取り纏めた。なお、別表1の作成に際し、元年干支または通用期間が記載されていない年代記類は、通用期間又は元年干支により不記載分を算出した。

### 2 年代記原型の算出

(1) 別表1により、次の事項に基づいて算出した。

(2) 年代記類には、『日本書紀』・『皇代記』の「孝徳紀の大化・白雉、天武紀の白鳳・朱雀・朱鳥、持統紀の朱鳥・大化」年号と混在している年代記類が多々見うけられたので、対象とする年代記類は次の基準により整理した年代記類とした。

ア イ・ウ以外の年代記類

イ 『日本書紀』・『皇代記』と同じ年号・

表1

## 古代逸年号(年代記・王代記)文献一覧

番号	文献名	出典史料	備考	文献所在地
1	加納家年代記	『石巻の歴史』第1巻 通史編(上)		宮城県 東北
2	来迎寺年代記	『山形県史』資料編15下		山形県
3	須佐須美神社旧記	『会津温故拾要抄』巻之三		福島県
4	私年代記	茨城大学管文庫		茨城県 関東
5	建仁年代記	東京大学史料編纂所	水戸彰考館文庫書写本	
6	本阿弥銘尽一略年代記	「刀剣美術」384号(刀剣博物館)		東京都
7	上極花實覚書祇集一歳代記			
8	年代記配合抄	静嘉堂文庫		
9	王年代記	宮内庁書陵部		
10	和漢年代記	国文学研究資料館、國學院大學図書館		
11	三国合運	東京大学史料編纂所		
12	和漢合運圖	東京大学史料編纂所		
13	麗気記私抄	国文学資料館(島原市松平文庫)		
14	建長寺年代記(和漢年代記)	建長寺本		神奈川県
15	永光寺年代記	「加能史料研究」第2号		石川県 中部
16	勝山記(妙法寺年録)	『勝山記と原本の考証』、『甲斐叢書』第8巻		山梨県
17	小佐野正秀覚書	国立公文書館	『勝山記』書写本	
18	上之坊王代記-王代記	『〔影印〕甲斐戦国史料叢書』二		
19	上之坊王代記-年代記			
20	大唐日本王代年代記	愛知学院大学図書館	『三国一覽合運図』を基に取捨選択及び追加補筆	愛知県
21	常光寺年代記	愛知学院大学図書館、豊橋市図書館		
22	塩尻一皇年代記抜抄	名古屋市蓬左文庫、刈谷市立図書館、 『日本随筆大成』(吉川弘文館)	『日本随筆大成』に誤写有。「東海の古代」95号(平成20年8月)参照	
23	重撰和漢皇統編年合運図	名古屋市蓬左文庫	『和漢合運』を基に作成	
24	和光院増修和漢合運図	東京大学史料編纂所		京都府 関西
25	興福寺年代記	『文科大学史料叢書』(国立国会図書館、西尾市岩瀬文庫)		
26	和漢合符	東京大学史料編纂所		
27	皇年代記	『冷泉家時雨亭叢書』48巻		
28	王代年代記	国文学研究資料館		
29	年代雑記	西尾市岩瀬文庫	岩瀬文庫：京都・柳原家旧蔵本	
30	二中歴	『尊経閣善本影印集成』14、『改訂 史籍集覧』第23冊		
31	如是院年代記	西尾市岩瀬文庫、『群書類従』26輯	岩瀬文庫：京都・柳原家旧蔵本	
32	万葉達一往古年号	『未刊国文古注釈大系』第3冊		
33	縁城寺年代記	『丹後史料叢書』第3輯		
34	昔九州は独立国にて年号あり	『日本史学新説』(国立国会図書館)	発行者：京都・史学者及雑誌社	
35	統和漢名教-日本偽年号	『益軒全集』2		福岡県 九州
36	歴代鎮西要略	『史籍集覧』初版(西尾市岩瀬文庫)、 『歴代鎮西要略』(文献出版)	解説者は『歴代鎮西志』を底本として作成と記述	佐賀県
37	歴代鎮西志	『歴代鎮西志』(青潮社)	解説者は『歴代鎮西要略』を参照して作成と記述	
38	襲國偽僭考-九州年号	国立国会図書館、『襲人偽僭考』(茨城大学管文庫) 「ヤマト叢誌」(国立国会図書館)		大分県
39	六郷山(屋山)年代記	『豊後国都甲荘』1、九州歴史資料館『研究論集』13		
40	宝光寺古年代記	「大隅」第31号、「近畿南九州史談」第5号		鹿児島県
41	海東諸国記	『朝鮮史料叢刊』第二、『海東諸国紀』(岩波文庫) 『日本庶民生活史料集成』第27巻	岩波文庫：東京大学史料編纂所本	朝鮮 外国
42	日本大文典	『日本大文典』(三省堂)		ポルトガル

※1 文献所在地覧は「著者・編者・書写者・現所有者」の所在地の順で作成した。

元年干支及び通用期間を記載している年代記類。なお、「朱鳥」年号については通用期間を1年とする。

ウ 天武天皇の在位期間内を白鳳元年としている年代記類。(例、白鳳元年壬申、白鳳元年癸酉等)

エ 年号の名称は、若干の異称があるが、無視をする。

(3) 前(2)により整理したところ、大きな異同は朱雀以降の年号である。それを整理したのが、表2「年代記類における古代逸年号の類型」である。

「朱鳥・大化・大長」をどのように記述しているかによって年代記類のパターンが判明した。

(4) 表2により、主たる部分を類型化したところ、5類型が検出された。

表2から類型を考察すると、次のように推測できる。

- ・類型Ⅰ及び類型Ⅴは、「朱鳥」を加えるか否かによっていずれかの類型になる。
- ・類型Ⅱ及び類型Ⅳは、年号を「大化」又は「大長」かによっていずれかの類型になる。
- ・類型Ⅲは本来は類型Ⅰであったが、「大長」の次に「大宝」と年号を継続させるため、「大化、大長」年号の通用期間を圧縮したと思われる。

また、類型別に該当する年代記類を掲載したのが、表3「類型別年代記類一覧表」である。

表2 年代記類における古代逸年号の類型

	元年西暦	640	647	652	661	684	686	692	695	698	701	704	708	類型NO		
	元年干支	庚子	丁未	壬子	辛酉	甲申	丙戌	壬辰	乙未	戊戌	辛丑	甲辰	戊申			
古代逸年号	年号(期間)	命長(7)	常色(5)	白雉(9)	白鳳(23)	朱雀(2)	朱鳥(9)	大化(6)	大長(9)					I		
																II
									大化(3)	大長(3)	大宝(3)	慶雲(4)	和銅(7)	III		
									大長(6)							IV
									大化(6)	大長(9)						
天皇	西暦	642	645	655	662	672	687	697								
	干支	壬寅	乙巳	乙卯	壬戌	壬申	丁亥	丁酉								
	名称(期間)	皇極(3)	孝徳(10)	斉明(7)	天智(10)	天武(15)	持統(10)	文武(11)								

- ※1 古代逸年号覧の「西暦」・「干支」は年号元年の「西暦」・「年干支」である。  
 ※2 天皇覧の「西暦」・「干支」は天皇が即位した年の「西暦」・「年干支」である。  
 ※3 類型Ⅰの「大長」の期間は701年(辛丑)～709年(癸酉)である。  
 ※4 類型Ⅱ～Ⅴは古代逸年号の後に「大宝」と続く。

表3 類型別年代記類一覧表

類型	年代記類	数量
I	本阿弥銘尽一略年代記	1
II	二中歴、六郷山（屋山）年代記、興福寺年代記（本文）	3
III	海東諸国記	1
IV	永光寺年代記	1
V	丸山晋司説 来迎寺年代記、建仁年代記、 上極花實覚書祇集一歳代記、 和漢年代記、三国合運、勝山記（妙 法寺年録）、小佐野正秀覚書、 上之坊王代記一王代記、 上之坊王代記一年代記、 大唐日本王代年代記、常光寺年代記、 塩尻一皇年代記抜抄、倭漢合符、 皇年代記、王代年代記、年代雜記、 如是院年代記、万葉緯一往古年号、 日本大文典、興福寺年代記（異説）	20
	計	26

### 3 算出結果

『二中歴』の継体年号を除いて、「善記～朱雀」まではほとんど同内容である。若干の違いは表4のとおりである。

### 4 古代逸年号の原形論

古代逸年号の原形説については、丸山晋司氏説及び古賀達也氏説の2説がある。大きな違いは、

- ・丸山説は『二中歴』の「継体・朱鳥」を年号として認めず、「仁王12年」を「仁王16年、聖徳6年」とし、「朱鳥9年、大化6年」を「大化6年、大長9年」として、「大宝」に続くとしている。
- ・古賀説は『二中歴』に「大長」を加え、「大化6年」を「大化9年、大長9年」として「大宝・慶雲・和銅」年号と重複しており、逸年号はそれで終了するとしている。

また、この2説を併せた別表2「古代逸年号年表」を作成したので参考にして下さい。

### 5 今後の検討課題

以上から、古代逸年号の原形を確認するためには、次の課題を検討する必要がある。

- ・「継体」年号の存在を認めるか否か。
- ・「朱鳥」年号の存在を認めるか否か。
- ・「大長」年号が「大宝」年号等と重複しているか否か。

表4 古代逸年号の異同

区分	年号(元年干支)通用期間	年代記類
異同1	倭景繩(戊寅)5 仁王(癸未)6 倭景繩(戊寅)11 仁王(一)0	如是院年代記、建仁年代記、歴代鎮西要略
異同2	仁王(癸未)6 聖徳(己丑)6 仁王(癸未)12 聖徳(一)0	二中歴
異同3	常色(丁未)5 白雉(壬子)9 常色(丁未)14 白雉(一)0	如是院年代記、万葉緯-往古年号、建仁年代記 歴代鎮西要略、歴代鎮西志
異同4	朱鳥(甲申)2 朱雀(甲申)2	来迎寺年代記

※年号(元年干支)通用期間覧：上段が多数、下段が例外

## 9月例会報告

### ○ 「天の香具山」どこか？

名古屋市 佐藤章司

- ①『万葉集』巻一の第2の高市岡本宮御宇天皇(舒明天皇)の歌
- ②岩屋戸の祭祀(『古事記』上巻、天の岩屋戸条)
- ③神武天皇と天の香具山(『日本書紀』神武天皇即位前紀己未年条)

の分析から、天香具山は鶴見岳とする『古代史の十字路—万葉批判—』(古田武彦著)の記述に納得したことを発表した。

### ○ 藤原宮出土の木簡

名古屋市 佐藤章司

出土した木簡に「朱鳥」や「大化」等の九州年号を記した木簡がなぜ出土しないのか。

また、701年を境にして「評」から「郡」にきっちり書き分けられていることに不自然さを感じるのだが、これらは「受け取り側の役人」の書き替えや修正の手が加わっているからではないかと発表した。もっと多くの木簡を観察分析する必要があると感じた。

### ○ 中学校で使用する歴史教科書の概要(1)

瀬戸市 林 伸禧

平成24年度から使用される歴史教科書(検定に合格した7冊)の記述されている内容を説明した。

第1回として、歴史関する次の基礎知識の記述について報告した。

- ・年代の表示(西暦、世紀、年号、干支)

3教科書に干支について説明がなかった。

近世まで日常生活と密接に関係しているのに、記述がないのが残念である。

- ・外国の国名・地名表示

中国の地名は慣用読み(日本語読み)として、古代朝鮮の国名を「高句麗・新羅・百濟」は現地読みとしている3教科書があり、整合がとれない。すべて日本語読みで良いのではないかと思う。

- ・旧国名

すべての教科書に記載されている。

### ○ 久留米レポートその2

名古屋市 石田敬一

2011年5月6日に久留米へ行き、そこで感じてきたことの報告の続きです。

岩戸山古墳とその資料館、石人山古墳とその資料館、高良玉垂命神社、大善寺、御塚・権現塚古墳を見て回り、とりわけ、今回の久留米巡りで注目した石人石馬、双脚輪状文、直弧文について私見を述べました。

## 10月例会に参加を

日時：10月16日(日) 午後1時30分～5時

場所：名古屋市市政資料館(第1集会室)

Tel:052-953-0051

名古屋市東区白壁1丁目3番地

参加料：500円(会員無料)

#### 交通機関

- ・地下鉄名城線「市役所」駅下車、東徒歩8分
- ・名鉄瀬戸線「東大手」駅下車、南徒歩5分
- ・市バス「市政資料館南」下車、北徒歩5分
- ・ 「清水口」下車、南西徒歩8分
- ・ 「市役所」下車、東へ徒歩8分

#### 駐車場

- ・名古屋市市政資料館：12台収容(無料)
- ・ウィルあいち(愛知県女性総合センター)地下駐車場：南隣、有料(30分170円)
- ・鈴木不動産コインパーク：南東角交差点の東、有料(40分200円)

### 今後の予定

11月例会：11月20日(日) 名古屋市市政資料館

12月例会：12月18日(日) 名古屋市市政資料館

Tel:052-953-0051

名古屋市東区白壁1丁目3番地

例会は、11月・12月とも**第3日曜日**です。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。